



みんなの水泳……日々徒然

2016ジャパンパラ水泳大会～さあ、リオへ… ～2020東京に向けて…徒然～

▶はじめに

前回は、フンシャル（ポルトガル）で2016年5月1日～7日まで開催されたFunchal 2016 IPC Swimming European Open Championshipsについて、見聞きしたことや感じたことをお伝えしました。

今回は、先の7月17日、18日に横浜で開催された2016 ジャパンパラ水泳競技大会やいよいよ始まるリオパラリンピック大会に向けて、パラ水泳のルールなどについてお伝えします。

▶今年は横浜で… 2016ジャパンパラ水泳競技大会…

2014年まで10数年のあいだ、大阪のなみはやドーム開催だったジャパンパラ水泳競技大会は、昨年は東京（辰巳）での開催、今年は横浜国際プールでの開催となりました。



2016ジャパンパラ水泳競技大会

▶ルールエクセプションとは…?

パラリンピック水泳には、独特のルールがいくつか存在します。いわゆる健常者の競泳のルールであるFINA（国際水連）ルールが基本ではありますが、障がいゆえにできないことについては、例外が認められます。これはクラス分けされるときに個々の選手に付与されるもので、Rule Exception Codeと呼ばれます（ルールエクセプション、規則の例外事項、RE等と表記されます）。これまでもこの連載で何回か説明してきていますが、リオパラリンピック目前の今、あらためてお伝えしておきたいと思います。

例えば、S11クラスの選手について考えてみましょう。S11の場合には、IPC Swimming規則では安全上の配慮として、「タッパーが必ず必要」というルールがあります。また、光覚のあるなしについて公平を期すために「不透明なゴーグルを必ず着用する」とされています（両眼ともに眼球のない場合には不要、また顔面の形状等、なんらかの理由でゴーグルの着用が困難な場合

には、スイムキャップ等、別のものでも両眼部分を覆うなども許される）。

●ルールエクセプション

H	聴覚障がい重複しているため、視覚的にスタート合図がわかるライト等が必要
Y	スタートに補助具等（スターティングデバイスと呼ばれる）を使用してもよい
E	背泳ぎのスタートにおいて、スターティンググリップを握れない場合には、プールの端を持ってスタートしてもよい
A	スタートや入退水に介助が必要
T	タッパーが必要
B	不透明なゴーグルを着用しなければならない
0	例外事項なし
1	背泳ぎのスタートで片手でグリップを握ってスタートしてもよい
2	平泳ぎとバタフライにおいて、折り返しやゴール時に、右上肢で片手タッチしてもよい
3	平泳ぎとバタフライの折り返しやゴール時に、左上肢で片手タッチしてもよい
4	平泳ぎとバタフライの折り返しやゴール時に、左上肢で同時タッチの意思を見せながら、右上肢で片手タッチしてもよい
5	平泳ぎとバタフライの折り返しやゴール時に、右上肢で同時タッチの意思を見せながら、左上肢で片手タッチしてもよい
6	平泳ぎとバタフライの折り返しやゴール時に、同時タッチの意思を見せながらタッチする
7	平泳ぎとバタフライの折り返しやゴール時に、上半身の一部でタッチすればよい
8	平泳ぎにおいて、右足はノーマルなキック動作が必要
9	平泳ぎにおいて、左足はノーマルなキック動作が必要
12	平泳ぎにおいて、下肢をキック動作せずにひきずるか、ノーマルなキック動作の意思を見せながらキック動作する
+	バタフライキック動作ができる機能がある（平泳ぎの泳法審判の参考として）

「TB、0」のREを持つS11の選手に次のようなことが起これば、失格となります。

- ・レースにおいてタッパーがいなかった、タッパーがいたがタッピングし損ねた（タッピングを忘れた、タッピングしようとしたが、選手に当たらなかった、など）。
 - ・レース後に泳法審判がゴーグルをチェックした際に、ゴーグルが完全に不透明でない状態であった。
- 上記については、全盲の選手本人のミスではないのでしょうか

が、選手が失格となります。非情にも思いますが、ルールはルールです。選手の安全や公平を期すためのものですので、遵守が求められます。



タッピングが当たらずに失格



レース後にゴーグルをチェックする審判

▶その他…IPC独特のルール

選手個々にクラス分け時に付与されるRE以外にも、IPC Swimming独特のルールがあります。

・フィートスタート

S1 / SB1 / SM1～S3 / SB3 / SM3までのクラスに許されるもので、写真のように、介助スタッフ（選手側で用意する。通常はコーチやチームスタッフ。）が下肢を壁につけて保持し、スタート合図で手を離す（勢いをつけて押すなどは許されない）。

・水中スタートなど
医学的留意事項等の理由など、飛び込みでスタートすることを選ばないで、水中からスタートすることが許される。※スタート台に座った状態からのスタートや、スタート台横からの飛び込みも許される。



手前の選手はスタート台をつかんで、スタート台横からの飛び込み。奥には水中スタートの選手も



フィートスタート（手前）



タオルをくわえて補助具にしたスタート



スタート台に腰掛けた状態から飛び込んでスタート



介助スタッフが腰を支えて保持している状態からスタート

▶コースの逸脱は…必ず失格となる?

今回、S11クラスの選手が、レース中に隣のレーンに入ってしまうということが起こりました。スタートの後、隣のレーンに入り、50mで折り返した後、さらにもう一つ隣のレーンに入るといったことが起こりました。スタートしたレーンから2つずれたレーン

でゴールした訳です。

視覚障がいのある選手の場合、スタートや折り返しの際に角度がついてしまい、隣のレーンに入ってしまうことが実際の大会でも起こります。特にストロークサイクルの大きい平泳ぎやバタフライ、勢いについている飛び込みスタート時や壁を強く蹴る折り返し（ターン）時に起こりやすいです。

FINAのルールであれば、レーンの逸脱は失格となりますが、IPC Swimmingのルールでは、失格となる場合とならない場合があります。他の選手を妨害せず、ゴールした際のレーンが空いていれば、失格にはなりません。

しかし、他の選手を妨害した場合や、ゴールしたレーンで他の選手が競技している場合には、レーンを逸脱した選手が失格となります。

▶日本式の式典から…



2016ジャパンパラ水泳競技大会の開始式

昨年までは大会初日の予選の前にいわゆる日本式の開会式が行われていましたが、今回は、午後の決勝前に開始式という式典が行われる形となりました。

海外の大会でもよくある方式で、午前の予選のセッションは淡々と開始されますが、午後の決勝セッション前に大会関係者の挨拶やマスコットの紹介、マーチングバンドの演奏などが行われるのです（開催都市の市長が自身のこどもを連れてカジュアルに挨拶するようなこともめざらしくありません）。東京2020パラリンピックをにらんで、今後もいろいろなことが「国際」方式になっていくように思います。

今回は、主催者の（公財）日本障がい者スポーツ協会の鳥原会長の挨拶とスポンサー各社の紹介が行われました（開始式でのスポンサーの紹介は海外ではあまり見かけませんが…）。

IPC競技規則の研修も併催されました



Sueさん（右）と筆者

今回のジャパンパラ大会に併催する形で、IPC Swimmingの競技規則の研修会も行われました。

IPC SwimmingからHead of Technical Control and OfficiatingのSue Prasadさんをお招きして、ジャパンパラ大会に先立って2日間の講義、ジャパンパラ大会での競技役員としての実践と充実した研修でした。

Sueさんは、ロンドン2012パラ、およびリオ2016パラの水泳競技のTD（Technical Delegate）でもあり、その豊富な経験から様々なことを研修でお話し

くださいました。



Sueさんの研修会は、2020年東京を控えた私たちにとって、非常に有意義なものとなりました